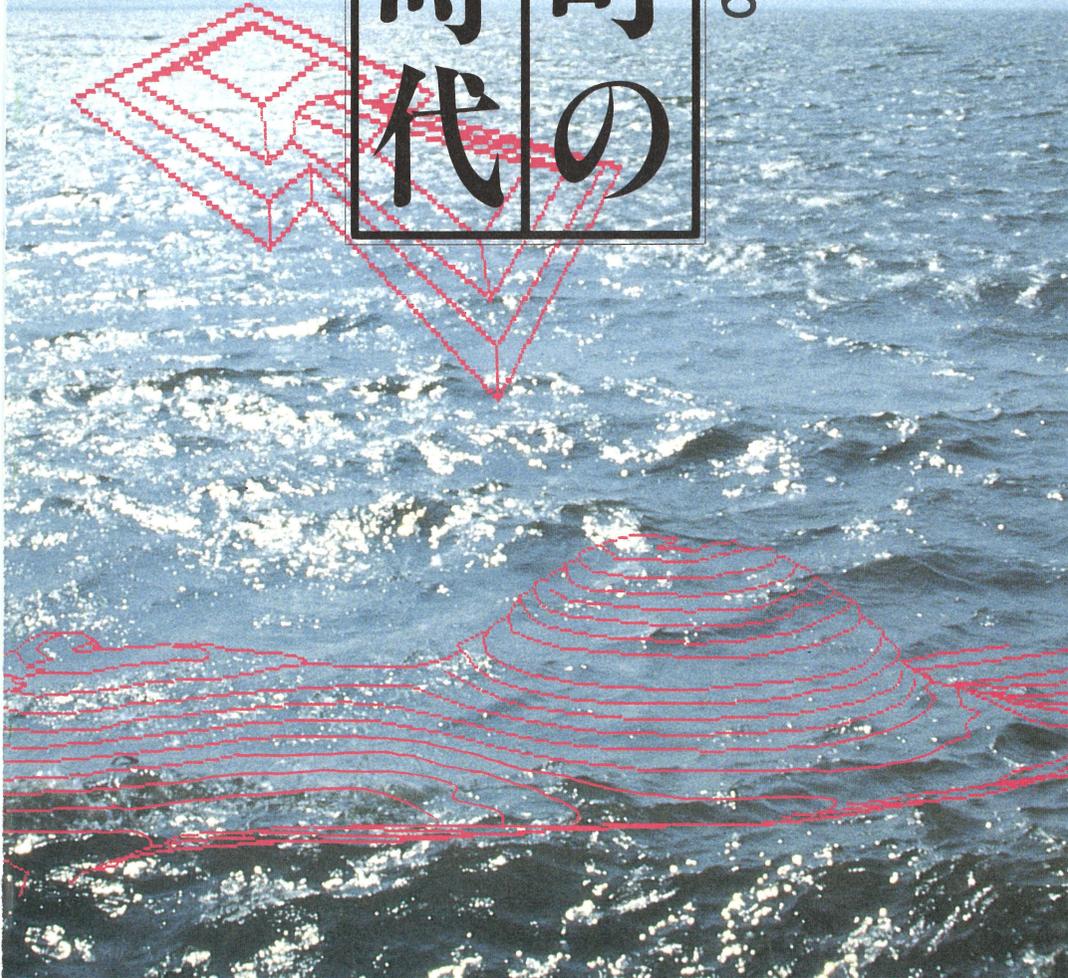


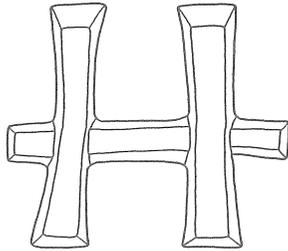
穴道町ふるさと文庫 6

穴道町の  
古墳時代



穴道町ふるさと文庫 6

穴道町の  
古墳時代



# 目 次

I はじめに	1	3. 宍道川(佐々布川)周辺の古墳	25
II 古墳の造られた時代	2	(13) 佐々布下1号墳	25
1. 古墳時代とは	2	(14) 清水谷・矢頭遺跡	26
2. 古墳の大きさと種類	2	(15) 上野1号墳	28
3. 古墳の移り変わり	3	(16) 水溜古墳群	30
III 宍道町の古墳紹介	5	(17) 宍道要害山古墳	31
1. 来待川周辺の古墳	6	(18) 才横穴墓群	32
(1) 横田古墳	6	(19) 随音寺横穴墓群	34
(2) 松石古墳群	7	4. 江尻川周辺の古墳	36
(3) 松石横穴墓	9	(20) 足頭古墳群	36
(4) 栗尾山横穴墓群	10	(21) 小佐々布横穴墓群	37
(5) 大野原古墳	11	IV 宍道町の古墳時代	39
(6) 知原古墳群	13	V 古墳時代前後の宍道町	47
(7) 鏡北廻古墳	14	1. 古墳時代より前の宍道町	47
2. 同道川周辺の古墳	16	(1) 縄文時代	47
(8) 横見1号墳	16	(2) 弥生時代	47
(9) 椎山古墳群	17	2. 古墳時代より後の宍道町	49
(10) 伊賀見古墳群	19	奈良時代	49
(11) 下の空古墳	22	VI おわりに	51
(12) 岩穴口古墳	23		

# I はじめに

実道町には先人たちの残した数多くの埋蔵文化財があります。とりわけ、古墳は私たちの身近に存在する文化遺産としてよく知られています。

しかし、一つ一つ見ていくと規模や内容等それぞれに異なり、いろいろな特徴をもっています。では、これらの古墳はいつ、どのような背景で造られたのでしょうか。

本書は、古墳についての疑問を解決し、一つでも多くの古墳を実際に歩いて見ていただくためのガイドブックです。古墳の中にはすでに消滅したものもありますが、内容が分かっており、なおかつ、地域の歴史を知るために大切な古墳はなるべく多く掲載するようにしました。

本書の出版にあたり、ご協力いただきました皆様、熱心にご指導いただきました諸氏に心より感謝し、お礼を申し上げます。

## (注意事項)

古墳の多くは個人の土地にあります。説明板などのない古墳を見学する時には所有者の許可をもらうようにして下さい。また、石室や横穴墓を傷めないようにしましょう。

## Ⅱ

# 古墳の造られた時代

## 1. 古墳時代とは

今から1,600年ほど前（3世紀末から4世紀初め）、弥生時代から大きな勢力をもっていた地域では、他の地域の豪族と同盟を結びながらさらに大きな力をもつようになりました。その豪族たちの連合体の中で盟主となったのは、奈良県を中心に勢力をもつ大和王権でした。大和王権は首長の死に際し、その権力の象徴として、また、王位継承の儀式の場として山のように巨大な前方後円墳というお墓を築きました。

各地方の豪族たちも大和王権の葬送方法を受け入れ、その身分や経済力に応じて、前方後円墳を基本に大小さまざまな古墳を造るようになりました。このように政治的な背景をもって古墳を造り続けた3世紀後半から7世紀までの約400年間を古墳時代と呼んでいます。

## 2. 古墳の大きさと種類

古墳の形には前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳などがあります。これらの古墳を造ることのできる人はかなりの身分の人に限定されていました。

ところで、日本で一番大きな古墳はどれくらいの規模でしょうか。大阪府堺市にある大仙陵古墳（伝仁徳天皇陵）は全長が480mもあり、

平面積では世界最大の墳墓です。鳥根県で最も大きい古墳は出雲市にある全長100m（推定）の大念寺古墳<sup>だいねんじ</sup>です。宍道町では全長35m<sup>しい</sup>の権山1号墳<sup>やま</sup>が一番大きい古墳です。これだけの古墳を造るには多くの労働力が必要です。たとえば、先の大仙陵古墳は延べ約140万人の労働力が必要だったと考えられ、一日100人で約4年はかかるといわれています。したがって、古墳を造ることができた人がいかに大きな権力と経済力をもっていたかということが分かるでしょう。その労働力として駆り出されたのは、たぶんかなり広い範囲から集められた農民たちだったのでしょう。

ちなみに、古墳の形や大きさは身分や大和王権との結びつき、経済力などによって決められたもので、自由だったわけではありません。

### 3. 古墳の移り変わり

古墳時代は、埋葬施設<sup>まいそうしせつ</sup>や副葬品<sup>ふくそうひん</sup>（被葬者とともに埋めた品々）の種類より前期（4世紀ごろ）、中期（5世紀ごろ）、後期（6世紀～7世紀ごろ）に分けられます。

〔前期古墳〕 典型的な前期古墳は平野などが見渡せる高い場所に築かれ、前方後円墳の後円部に長さ7m前後<sup>たてあなしきせきしつ</sup>の竪穴式石室を設け、その内に大木を2つに割って中をくり抜いた木棺<sup>もっかん</sup>が納められています。この時代の古墳は、一般的に一人の首長のためのお墓でした。副葬品としては鏡、玉、大刀、剣などがよくみられます。

なお、出雲地方では前方後方墳や方墳も多く造られました。

〔中期古墳〕 中期古墳は、しだいに平地にも築かれるようになり、埋葬方法は竪穴式石室から長持形石棺、舟形石棺、箱式石棺、箱式木棺などを直接墳丘に埋める方法に変わりました。副葬品としては武器が多く、大陸から取り入れられた馬具や須恵器も新たに加わり  
ます。

〔後期古墳〕 後期古墳になると埋葬後にも入口を開け閉めできる横穴式石室を埋葬施設として用いるようになります。これは一人の首長だけではなく、親族などを後で葬る（これを追葬といいます）ようになったからで、石室の中には家形石棺などが置かれているものもあります。また、同じように丘陵の斜面などに穴を掘って、追葬ができる横穴墓も造られ始めます。小規模な古墳が急に増えるのはこの時代です。副葬品として耳輪、玉類、馬具、直刀、須恵器などがみられます。

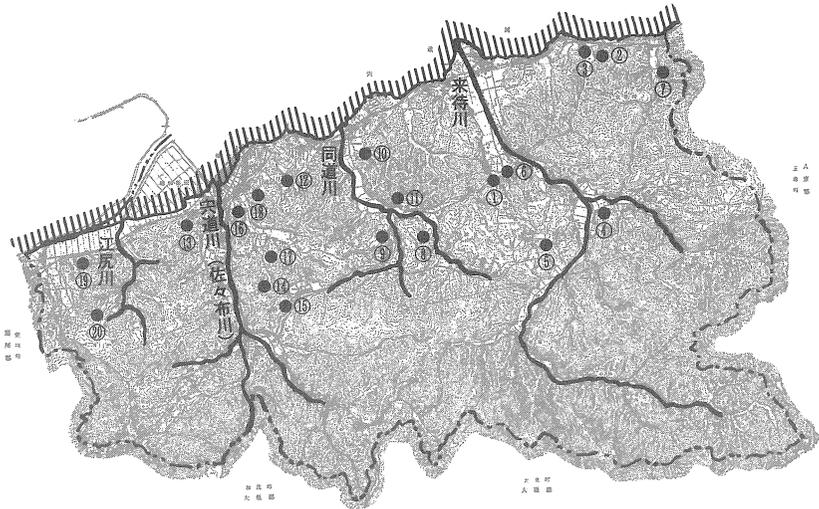
やがて、6世紀後半ごろになると前方後円墳はしだいに姿を消し、新たに畿内を中心に方墳が多く造られるようになり、同時に横穴式石室も小形化します。

〔古墳の消滅〕 7世紀後半になると古墳は一部の地域を除いてまったく造られなくなり、横穴式石室や横穴墓への追葬も少なくなってきました。これは「律令体制」と呼ばれる法律にもとづいた政治制度が整っていったため、大きな古墳に権威を象徴させる必要がなくなったことが原因ではないかといわれています。さらに、仏教の広がりにより死後の世界観が変わったことも原因ではないかといわれています。

### Ⅲ 宍道町の古墳紹介

宍道町にも数多くの古墳があります。古墳の分布と内容を調べることによって、古墳時代の社会の仕組みや、政治勢力が分かってきます。

ここでは来待川<sup>きまち</sup>周辺、同道川<sup>どうどう</sup>周辺、宍道川<sup>しんじ</sup>（佐々布川<sup>さそう</sup>）周辺、江尻川<sup>えじり</sup>周辺という水系を古墳時代の地域単位と考え、そこにある主な古墳を紹介してみたいと思います。



- |           |            |         |            |
|-----------|------------|---------|------------|
| ① 横田古墳    | ② 松石古墳群    | ③ 松石横穴墓 | ④ 栗尾山横穴墓群  |
| ⑤ 大野原古墳   | ⑥ 知原古墳群    | ⑦ 鏡北廻古墳 | ⑧ 横見1号墳    |
| ⑨ 椎山古墳群   | ⑩ 伊賀見古墳群   | ⑪ 下の空古墳 | ⑫ 岩穴口古墳    |
| ⑬ 佐々布下1号墳 | ⑭ 清水谷・矢頭遺跡 | ⑮ 水溜古墳群 | ⑯ 宍道要害山古墳  |
| ⑰ 才横穴墓群   | ⑱ 随音寺横穴墓群  | ⑲ 足頭古墳群 | ⑳ 小佐々布横穴墓群 |

番号は紹介する古墳番号に一致  
範囲は現在の宍道町

# 1. 来待川周辺の古墳

## (1) 横田古墳

宍道町西来待（内ヶ峠）

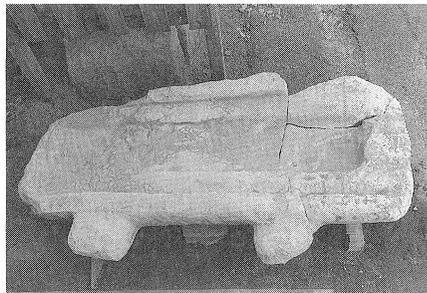
来待川がつくる谷平野の奥、内ヶ峠集落の東側にある水田に位置します。1987年（昭和62年）の圃場整備中に、ほじょうの圃場整備中に、ふながたせっかん 舟形石棺の蓋が見つかったため初めて知られた古墳です。

もともと墳丘があったのですが、現在はまったく分かりません。この古墳のように千数百年の歳月の中で、耕作や風雨などによってくず壊れていったものも多かったのです。

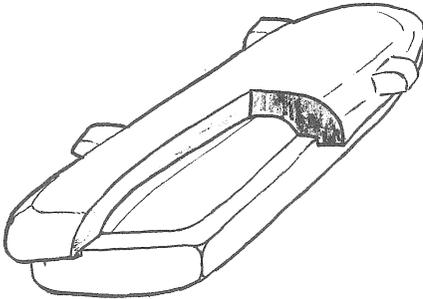
石棺の蓋は、長さ167cm、幅60cm（頭部）～66cmの大きさと、外面は「板カマボコ状」に加工され、内面は2段に彫り込まれています。  
なわかけ とつき 縄掛突起と呼ばれる出っ張りが両側に2個ずつ、計4個付いています。

石材は玉湯町から宍道町来待にかけて産出されるせきえいあんざんがんしつぎょうかいがん 石英安山岩質凝灰岩で、地元では通称「しろこいし白粉石」と呼ぶ柔らかくて白っぽい石です。同様な石棺としては玉湯町のとくれんば徳連場古墳や玉造つぎやま築山古墳などがあり、宍道湖南岸に舟形石棺の分布圏があったことが分ります。

副葬品は見つかっていませんが、古墳の造られた時期は古墳時代中期で5世紀代と考えられます。



内側からみた舟形石棺の蓋



舟形石棺の模式図

## MEMO

石棺は現在、宍道町中央公民館で保存されています。1987年、宍道町教育委員会により確認調査が行われています。

## (2) 松石古墳群

宍道町大字東来待（弘長寺）

宍道湖に突き出た標高30mのなだらかな丘陵に9基の古墳が分布していました。北側、JR山陰線に接する高所に1号墳が、西側の中央に4号墳が位置し、それに挟まれて2、3号墳が、西端に5～7号墳が、さらに東端に9、10号墳が造られていました。また、北側斜面には後述する横穴墓（松石横穴墓）も知られています。

1号墳は一辺約15mの方墳です。これがもっとも大きいもので、他

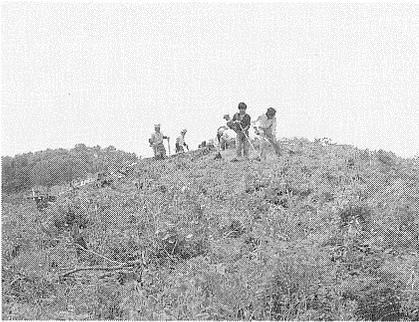
### 松石古墳群一覽表

番号 項目	1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳	7号墳	8号墳	9号墳
墳形 規模(m)	方墳 14.7×15.2	— —	方墳 10.0×11.3	— —	方墳 約 (11×11)	方墳 約 (9×9)	方墳 約 (7.5×7.5)	方墳 7.2×8.7	方墳 9.0×6.3
主体	木棺直葬(1)	箱式石棺(1)	箱式石棺(1)	箱式石棺(1)	箱式石棺?	木棺直葬?	木棺直葬?	木棺直葬(2)	木棺直葬?
遺物	管玉(6) 小玉(1)	遺物なし	遺物なし	直刀(1) 鉈(1)、斧(1)	不明	不明	不明	須恵器 坏片(1)	不明
備考			舟形石組		調査前崩壊	調査前崩壊	調査前崩壊		調査前崩壊

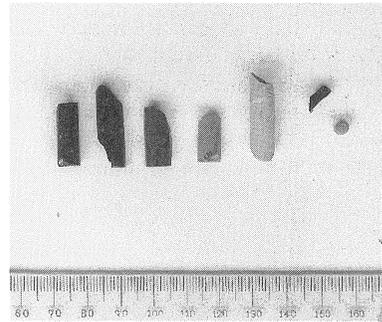
はすべて一辺10m前後と小さく、形が分かる古墳はほとんど方墳でした。

これらの古墳の中からは来待石の切石で造られた箱式石棺が3基と、木棺と考えられるものが2つ以上見つかりました。副葬品は1号墳の管玉6、ガラス製小玉1、4号墳の鉄刀1、鉄斧1、やりがんな（槍に似た古代の<sup>かな</sup>鉋）1など、わずかしは見つかっていません。

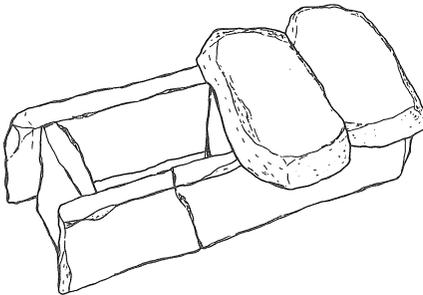
古墳の造られた時期は出土品より5世紀後半から6世紀代と推定されます。



調査風景



松石1号墳から出土した管玉と小玉



箱式石棺模式図

## MEMO

この古墳群は住宅造成に先だって、1976年（昭和51年）、宍道町教育委員会によって発掘調査が行われました。現在は眺江台団地になっています。出土品は宍道町教育委員会にて保管されています。

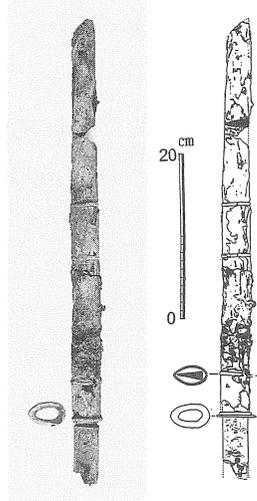
### (3) 松石横穴墓

宍道町大字東来待（弘長寺）

宍道湖を望む丘陵の北側斜面に掘りこまれた横穴墓で、1969年（昭和44年）の山陰線複線化工事中に発見されたものです。場所は松石古墳群の北側斜面にありました。

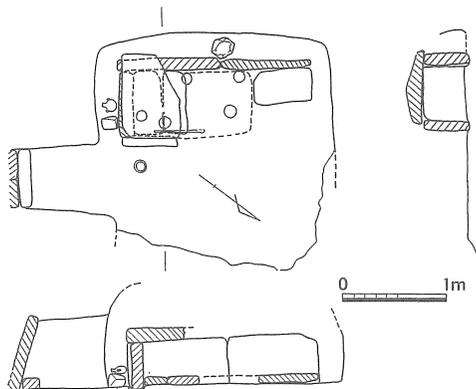
調査の時には<sup>げんしつ</sup>玄室（死者を葬る室）の半分が壊されており、天井の形は不明でしたが、床の形は正方形で、西側の壁に沿って<sup>きりいし</sup>切石（切ったようにきれいに加工した石）の組み合わせの石棺が置かれていました。また、<sup>えんどう</sup>羨道（玄室へ入る細長い通路）の入り口は2枚からなる切石で閉ざされていました。しかし、<sup>ぜんていぶ</sup>前庭部（羨道の前の平坦地）の詳しい様子はわかりません。

副葬品は石棺の周辺から  
<sup>こんどうそうたち</sup>金銅装大刀（金メッキした銅板を装飾した大刀）1、  
<sup>てつぞく</sup>鉄鏃（弓矢の先に付ける）2、  
<sup>すえき</sup>小刀2、<sup>ふたつき</sup>須恵器（蓋坏身4、蓋坏蓋4、高坏1）があり、中でも大刀は<sup>つか</sup>柄に



出土大刀写真

実測図



松石横穴墓実測図

点彫りで龍が打ち出されている優れた品です。横穴墓の造られた時期は6世紀の後半と考えられますが、<sup>ついそり</sup>追葬も認められています。

## MEMO

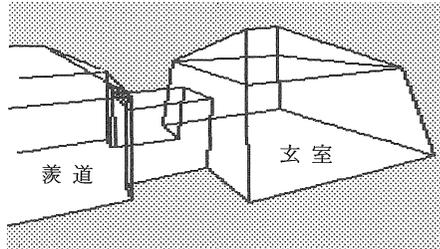
横穴墓はすでになくなっていますが、出土品は宍道町菟古館で展示されています。

### くりおやま (4) 栗尾山横穴墓群 3号穴

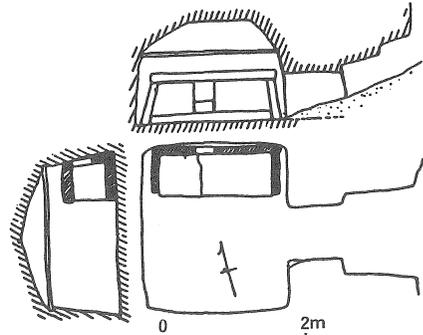
宍道町大字上来待（来待大森）

来待川のおりなす谷の奥にある旧仔牛育成センターに接する低い丘陵の東斜面に5穴の横穴墓が掘り込まれています。その中で3号穴は来待石の切石でできた珍しい石棺をおさめており、注目されています。

この横穴墓の玄室は奥行き約2.2m、幅約2mで、床の形は正方形に造られており、全体を家形にかたどっています。石棺は壁に接して置かれていましたが、今は解体されています。復元してみると、長さ約1.8m、幅約0.8m、高さ約0.8mで、来待石を何枚か組み合わせて、横



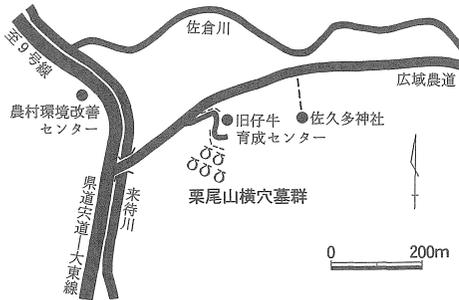
横穴墓の模式図



栗尾山横穴群 3号穴の実測図  
(山本清『西山陰の横穴』より)

口より人を葬る形でした。また、天井石は家形ではなく、板状になっていますが、このような天井と横口をもつ石棺を、仏像を安置するずしがたかん厨子の形に似ていることから厨子形棺と呼びます。

古くから入口が開いていたために副葬品は知られていません。入口には穴をふさぐための長さ110cmの来待石の切石が残っています。



**MEMO**

佐久多神社の西側の丘陵にあります。この丘陵の西隣の丘陵にも横穴墓群があり、同様な石棺が1基発見されています。

おおのぼら  
**(5) 大野原古墳**

宍道町大字上来待（大野原）

県立わかたけ学園の南東にあたり、大野地区にのびる丘陵の頂部平坦地に築かれた18.5m×19.5mのほうふん方墳です。高さは約4.0mで、中段に幅約1.5mの段がめぐっています。（これは二段築成と呼ばれ、にだんちくせい大型の墳丘によく見られます）

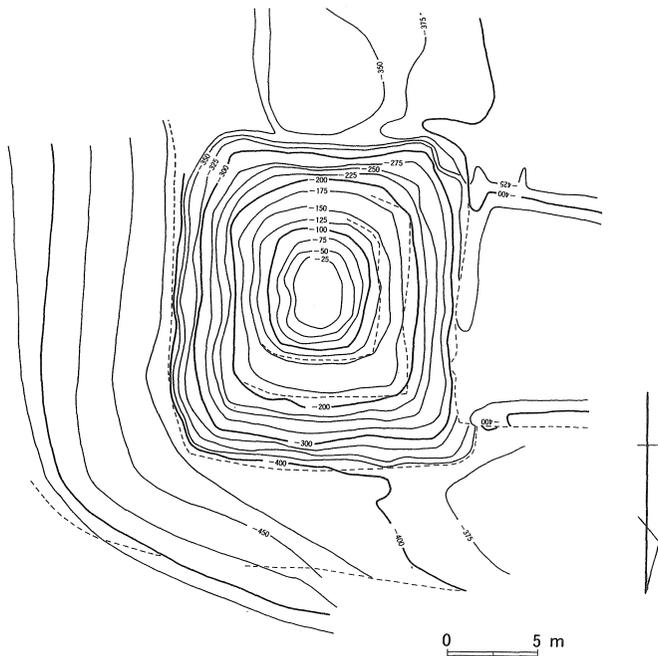


大野原古墳

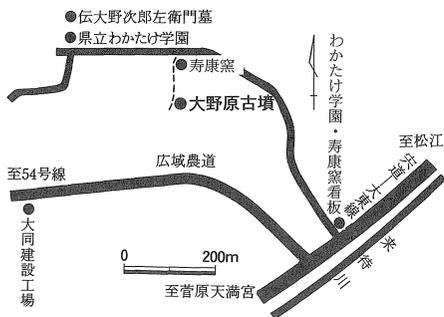
はにわ 植輪、ふきいし 葺石はありません。

副葬品は発見されていません。

なお、地元では首塚と呼ばれており、頂部に小さな祠ほこらが祭られています。



大野原古墳測量図



## MEMO

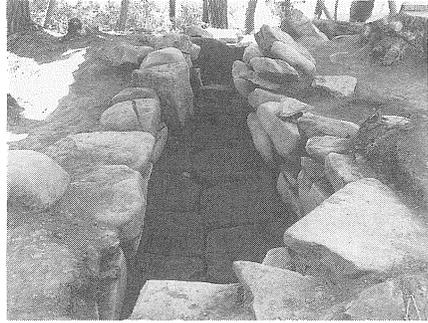
国道9号から県道安道―海潮線を菅原天神へ向かう途中に県立わかたけ学園、寿康窯の案内板がありますので、そこを入ります。大野原古墳は同窯の南約50mの地点です。

ちほら  
(6) 知原古墳群

宍道町大字東来待（久戸）

来待川中流に広がる谷平野に面した低い丘陵の上に造られた古墳群です。ここでは2号墳と4号墳（B古墳）を紹介しましょう。

2号墳は丘陵の北側斜面に造られた小さな古墳です。自然石や割石（割って造った石）でできた細長い横穴式石室よこあなしきせきしつが見つかり、玄室の大きさは奥幅約95cm、前幅約50cmです。高さは天井石や壁が崩れており、よく分かりません。



知原2号墳の横穴式石室  
（山本 清氏 写真提供）

床には平らな石が整然と敷かれており、その上から副葬品の直刀、刀子とうす（小刀）、耳環、須恵器が見つかりました。玄門には玄室えんどうと羨道せんどうを区切る柱石そでいし（袖石という）が立てられていました。造られた時期は7世紀の前半と推定され、来待地区にありながら来待石の切石で造られておらず、注目されています。



知原4号墳の横穴式石室

4号墳は直径約10mあまりの円墳で、表面には拳大程の大きさの河原石かほし（葺石ふきいしといいます）が敷きつめられていました。埋葬施設として、自然石を並べた横穴式

石室が見つっていますが、玄室は長さ4.5m、奥幅1.8m、前幅1.3mの大きさです。副葬品として直刀や須恵器の破片が出土しており、古墳の造られた時期は6世紀中ごろと分かりました。

## MEMO

知原2号墳は1968年、ゴルフ場建設に先立ち山本清氏により、また、知原4号墳は1971年、湖南荘建設に伴い門脇俊彦氏によって調査が行われました。2基とも現在はありません。

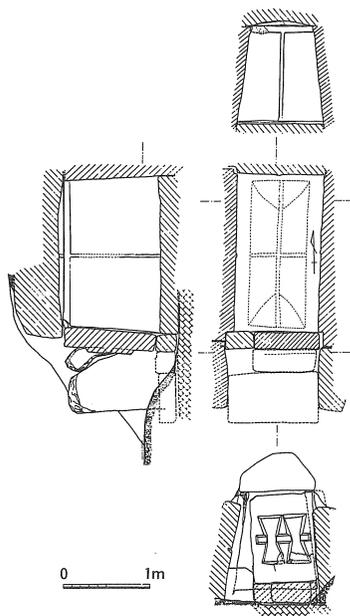
かがみきたご

### (7) 鏡北廻古墳

宍道湖から約400m南に入る玉湯町境に近い小さい谷の標高約60mの尾根付近に造られています。墳丘は一辺約10m、高さ2mほどの小さな方墳です。

埋葬に使った施設は来待石の切石で造られた横穴式石室で、ほぼ南を向いています。玄室の大きさは小さく、奥行き1.8m、幅1.0m、高さ1.2mです。各壁とも一枚石で、天井石の内と外とも家形いえがたせっかんに加工されており、家形石棺を思わせます。この

宍道町大字東来待（鏡）



鏡北廻古墳石室実測図

石室で珍しいのは、各壁と天井にある帯状の浮き彫りです。奥の壁と両側の壁には各壁を2分するような「T」字状に、天井には「+」字状に刻まれています。

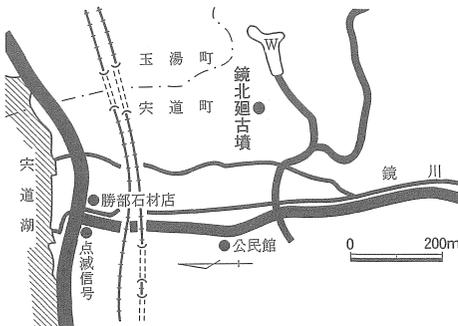
玄門を閉ざす閉塞石<sup>へいそくせき</sup>は羨道部に倒れています。縦1m、横72cm、厚さ20cmの大きい切石でできており、表面には門状<sup>かんぬき</sup>の浮き彫りが施されていますが、



閉塞石に門状<sup>かんぬき</sup>の陽刻をもつ古墳

この古墳の浮き彫りは縦棒が強調されています。閉塞石に描かれた同様な浮き彫りは宍道町白石の伊賀見1号墳、下の空古墳、玉湯町林の林8号墳の閉塞石にも見られます。なお、床石の下は来待石の岩盤です。

副葬品は知られていませんが、古墳の造られた時期は石室の構造から7世紀の中頃で、この地域では最終末の古墳と推定されています。



## MEMO

古墳の名前は麓の家の屋号「北廻」に由来します。

## 2. <sup>どうとうがわ</sup>同道川周辺の古墳

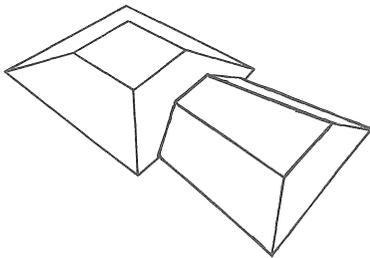
### (8) <sup>よこみ</sup>横見 1 号墳

宍道町大字西来待（横見）

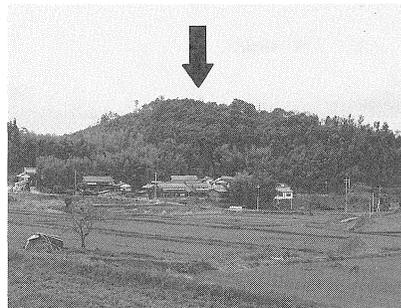
宍道湖より同道川を遡ること約 3 km、横見地区の谷平野をのぞむ丘陵の上に横見古墳群があります。このうち、丘陵の最頂部にある 1 号墳は前方後方墳で、全長約 20m、前方部先端の幅約 9 m、後方部の幅約 10m、前方部の高さ約 1.5m、後方部の高さ約 2 m という大きさです。小さい古墳ですが、墳丘の残り具合は良好といえましょう。

後方部のほぼ中央には長さ 1.7m、幅 0.7m の蓋石状の自然石が露出しており、埋葬施設は箱式石棺とも考えられます。

この古墳から遺物は見つかっていませんが、標高の高い丘陵上に造られていることから、前期から中期にかけての古墳ではないかと考えられます。



横見 1 号墳墳丘模式図



横見 1 号墳（矢印の地点）

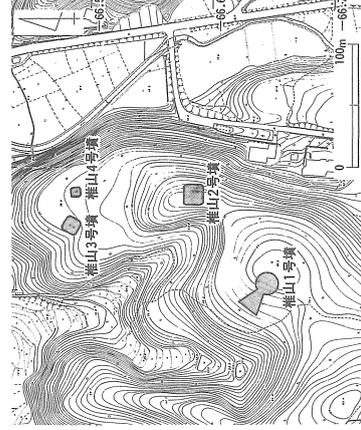
## ■ (9) 椎山古墳群

矢道町大字白石（下倉）

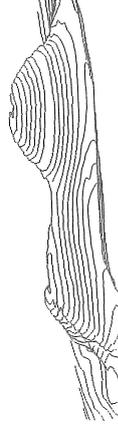
石宮神社から500mほど奥へ入った下倉の丘陵の上に、前方後円墳1基と方墳3基からなる4基の椎山古墳群があります。前方後円墳の1号墳は丘陵の最高部にあり、そこから北東に延びる尾根筋に向かって2号墳、3号墳、4号墳と並んでいます。

1号墳は丘陵上に広がる標高約52mの幅広い平坦面に築かれています。墳丘の形は前方後円墳で、大きさは全長35m、前方部先端の幅18m、前方部の高さ3m、くびれ部の幅8m、後円部の直径18m、後円部の高さ3.5mです。また、墳丘の周りには馬蹄形の周濠（周囲と古墳を隔てる空堀）があり、これに加えて

ると墓城の面積は2,000㎡にもおよびます。墳丘の表面を覆っていた葦石の一部がわずかに散らばっており、さらに墳丘に立てられた埴輪円筒の破片も見つかっています。



椎山古墳群の配置図



椎山1号墳鳥瞰図



椎山1号墳の墳丘（後円部より前方部をみる）

人を埋葬した施設ははっきりしませんが、後円部にある盗掘された跡には大きな加工された来待石が散らばっていますので、横穴式石室よこあなしきせきしつがあったものと推定されています。造られた時期は、副葬品等が発見されていませので明らかではありませんが、他の古墳と比べてみて6世紀代であったと思われます。

2号墳は1号墳の北東、約100mほど離れた標高45mの尾根に築かれた方墳ほうふんです。大きさは一辺約16m、高さ2.0～2.5mで、一辺の長さが短いわりに高さがあるのが特徴です。墳丘すその裾から50cmほど

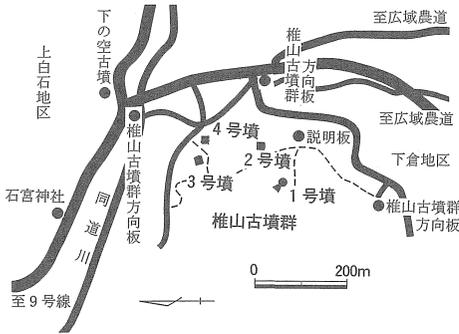


椎山2号墳の墳丘

上に1～1.5mの幅の平坦面にだん ちくせい（二段築成といえます）があり、整った形の古墳です。埋葬施設まいそう しせつと副葬品ふくそうひんは分かっていません。

3号墳は2号墳の北、約100mほど離れた標高35mの尾根に築かれた小型の方墳です。大きさは一辺12m、高さ2mで、頂部に一辺の長さ4.5mの平坦面があります。埴輪円筒の破片以外の遺物は発見されていません。埋葬施設は不明です。

4号墳は3号墳と近接しています。墳丘の多くは削られ、もとの形は失われていますが、一辺10mの小さな方墳と推定されます。埋葬施設、副葬品とも不明です。



## MEMO

下倉の集落とその周辺に案内板と説明板があります。

なお、1号墳は町内で最大の古墳であり、県指定史跡になっています。

## (10) 伊賀見古墳群

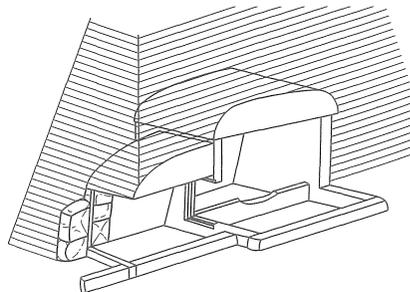
### 宍道町大字白石（下白石）

宍道湖から約300m南に入った標高20mの低丘陵の上に分布しています。現在3基の古墳が知られ、高い方から1号～3号墳と呼びます。

1号墳は見晴らしのいい尾根の頂部に造られています。墳丘はかなり変形しているために、一辺10mあまりの方墳とも、全長25mの前方ぜんぽう後方墳こうほうふんともいわれています。墳丘に葺石、埴輪はありません。

埋葬施設は長さ6mの横穴式石室で、北側に向かって入口が付いています。玄室の各壁はすべて来待石きまちいし（凝灰質砂岩ぎょうかいしつさがん）の切石を1枚～数枚使用しており、いわゆる石棺式せつかんしき石室せきしつの原形となるものです。

玄室げんしつの大きさは奥行1.8m、幅1.9m、高さ1.7mで、床の形はほ



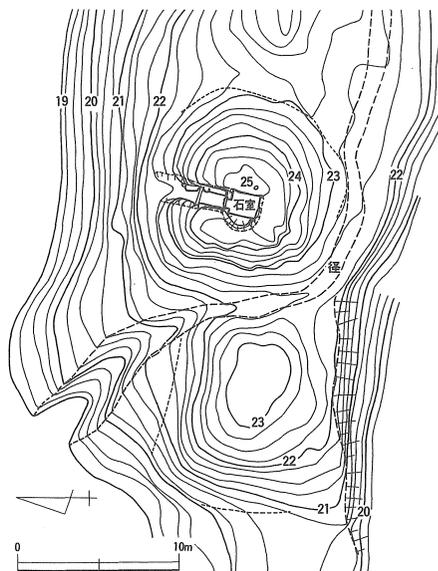
伊賀見1号墳の石室模式図

ぼ正方形です。床の中央部には「U」字状の浅い彫り込みをもつ細長い板石（<sup>ししょうしきりいし</sup>屍障仕切石といいますが）をすえ付けています。この仕切石は九州を起源とし、山陰地方の石室にも多く見られるもので、この石室も九州の影響を受けていることがうかがえます。

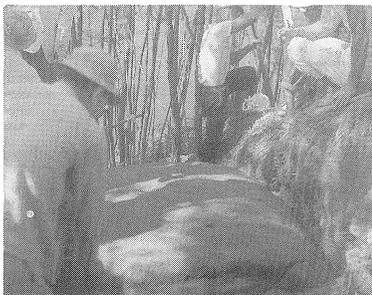
玄室と<sup>えんどう</sup>羨道の間には高さ、幅とも60cmの正方形にくり抜

くいた<sup>びんもん</sup>玄門があり、そこに「卍」状の浮き彫りをもつ閉塞石がはめ込まれたまま残っています。この模様は<sup>とびら かんぬき</sup>扉の門を表わしており、次に紹介する<sup>しも そら</sup>下の<sup>かがみきたざこ</sup>空古墳をはじめ鏡北廻古墳など宍道湖周辺で6例が知られています。

羨道は奥行1.6m、幅0.9mの大きさで、玄室の中心からやや西に造



伊賀見1号墳の墳丘測量図



伊賀見1号墳の発掘風景 (1958年)



現在の伊賀見1号墳の閉塞石

られています。羨門も切石によってできており、その外側にも石積み  
の壁が造られています。

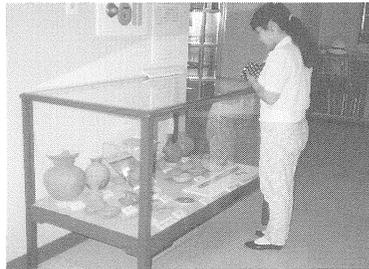
副葬品は、玄室の仕切石の東側に  
耳環（銀環）2、刀子2、須恵器  
（蓋坏2セット）が、西側に直刀1、  
鉄鏃30本以上、須恵器（甗1、高坏  
1、提瓶2）があり、羨道からも甗  
1が見つっています。

古墳の造られた時期は、発見され  
た遺物を見ると6世紀の中頃で、出  
雲地方で横穴式石室が造られはじめ  
た頃のものと考えられます。

2号墳は1号墳から少し下ったな  
だらかな斜面にあります。小さな方  
墳で、墳丘の大きさは一辺4.3m、  
高さ1.5mです。



伊賀見1号墳からの出土遺物（甗）



展示中の伊賀見1号墳の遺物（甗古館）



## MEMO

伊賀見1号墳は1958年（昭和33年）、山本清氏により発掘調査が行われ、『宍道町誌』に報告されています。宍道町で初めて発掘調査が行われた古墳です。

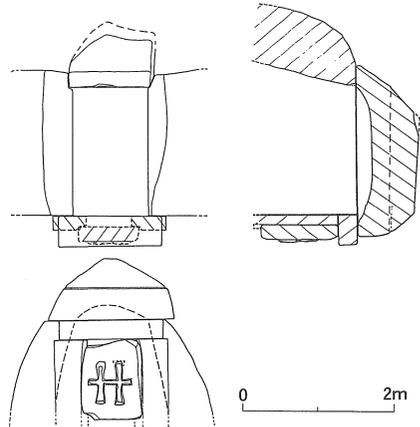
## (11) <sup>しも</sup> <sup>そら</sup> 下の空古墳

### 宍道町大字白石（上白石）

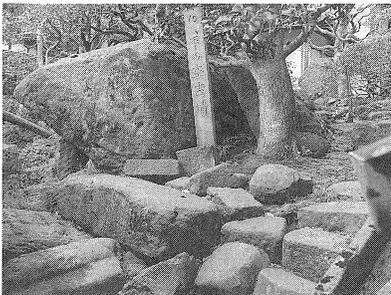
同道川と下倉川が合流する谷間にあります。付近の水田面から約3mほど高い民家（高木武久さん宅）の庭先にあり、すでに墳丘はなくなり、来待石で造られた小型の横穴式石室<sup>よこあなしきせきしつ</sup>が露出しています。

玄室の中には土砂が流れ込み、天井は崩れ落ち、玄門も解体され、石材が付近に積み重ねられています。また、羨道部は失われています。

玄室を復元すると奥行2m以上、幅1.5m以上と推定されます。いずれの壁も1枚石で、天井石は外面が家形に加工されており、いわゆる「石棺式石室」<sup>せっかんしきせきしつ</sup>とよばれているものです。玄門は散乱する石材から推定すると、閉塞石<sup>へいそくせき</sup>を受けるくり込みをもつ2枚の板石を立て、その上にまぐさ石を置いたものと考えられます。閉塞石は高さ1m、



下の空古墳の実測図（復元）



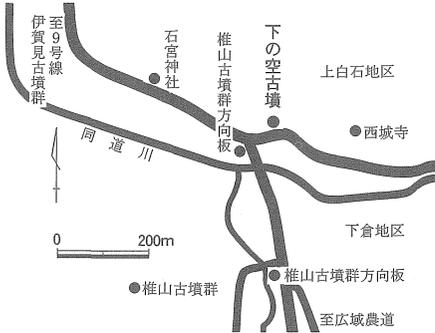
解体された下の空古墳



下の空古墳の閉塞石の陽刻

幅0.8mの切石で、表面には同じ谷の伊賀見1号墳、東来待の鏡北廻古墳と同様に門を表わす「**卍**」状の陽刻が彫られています。

副葬品は残っていませんが、造られた時期は石室の様子から伊賀見1号墳の少し後だと思われます。



## MEMO

宍道湖より南に1.1km入った山合いで、同じ谷には伊賀見1号墳、猪石・犬石で知られる石宮神社、さらに谷を挟んだ南の丘陵上には椎山古墳群があります。  
下の空古墳のレプリカが来待石で作成され、来待ストーンミュージアムに展示してあります。

## (12) 岩穴口古墳

宍道中学校の南にある小さい谷間の奥にあります。この古墳は水田の中に突き出た来待石の塊に直接横穴が開けられており、まるで石室が露出しているように見えます。

玄室は奥行1.5m、幅1.5～1.7mで、床面の形は奥に広がる台形です。天井はかなり崩れていますが、もと

### 宍道町大字宍道（一区）



岩穴口古墳



### 3. 宍道川(佐々布川)周辺の古墳

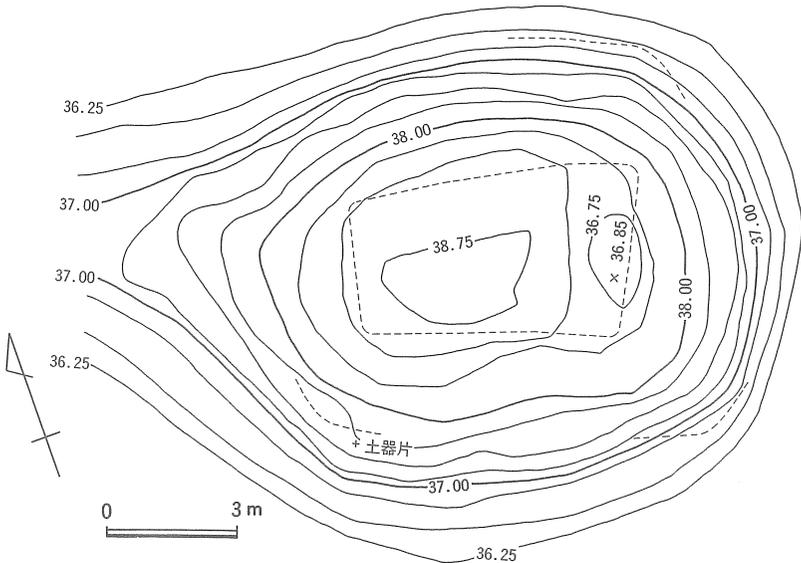
#### ■ (13) 佐々布下 1号墳

宍道町大字佐々布（佐々布下）

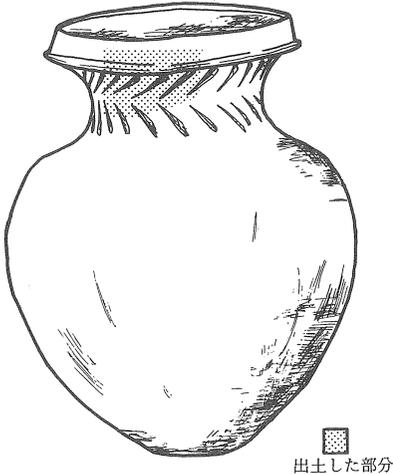
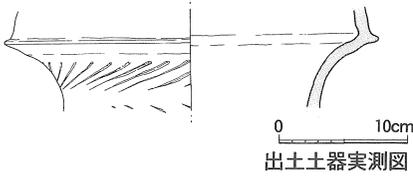
出雲平野を望む標高35mの小高い丘陵の上にあります。

小さな古墳で、現在は一辺15m×20m、高さ2mの方形状になっています。埋葬施設は未発掘のためによく分かっていません。出土品として頸部に羽状文という模様が施されている古い土師器の壺片が見つかっています。

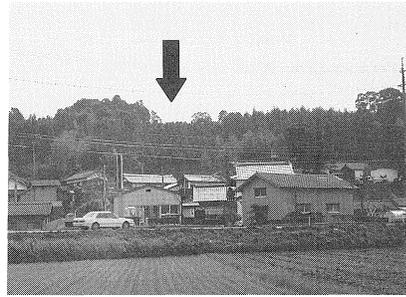
この古墳の造られた時期は古墳時代でも早い時期にあたり、現在見つかった中では宍道町内でもっとも古いものです。



佐々布下 1号墳の墳丘測量図



佐々布下1号墳出土土器の推定復元図



佐々布下1号墳遠景（矢印の地点）

## MEMO

佐々布下古墳群は3基以上からなる古墳群で、麓には旧山陰道が残るとともに、蔵敷くらしきの集落が広がっています。また、古墳のある丘陵かみけやまの東端には中世の山城である掛屋山城跡も知られています。

## (14) 清水谷・矢頭遺跡

宍道町大字白石（才）

現在の東部家畜市場から見つかった遺跡です。

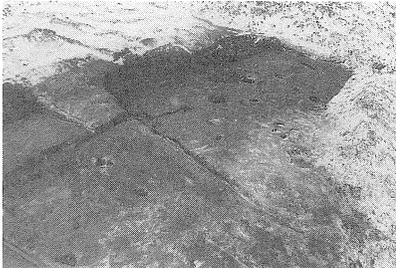
清水谷遺跡では清水谷2号墓と呼ぶ弥生時代の墳墓と清水谷5号、6号と呼ぶ2基の古墳が知られています。後で述べる水溜古墳群みずたまりと隣接していることから、一連の墳墓群と考えられています。

清水谷2号墓は宍道町で発見されている唯一の弥生時代のお墓で、径15m前後の楕円形だえんの墳丘から弥生時代後期に作られた高坏たかつき（お供え

用の器に脚が付いている土器)が出土しています。清水谷1号墳は一边10m前後の方墳、6号墳も同じ大きさの方墳でした。

矢頭遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての建物跡6棟と、横穴墓1穴が見つっています。

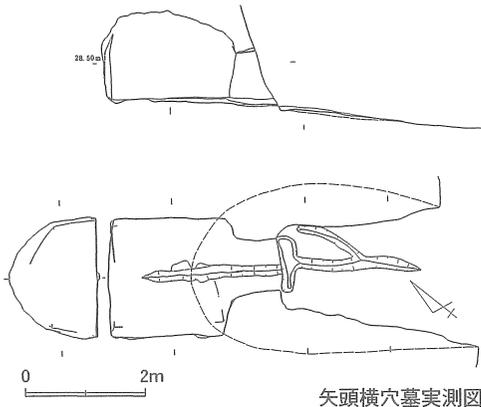
2号住居跡と呼ぶ<sup>たてあなじゅうきよあと</sup>竪穴住居跡は緩やかな斜面に造られており、約3分の2が残っていました。もともと一边7mほどの正方形の床面をもつ住居だったようです。中からは古墳時代中期に作られた<sup>はじき</sup>土師器が出土しました。この建物跡に生活していた人たちは水溜古墳群に葬られた人と何か関係をもっていたのではないのでしょうか。



矢頭遺跡から見つかった古墳時代の住居跡



住居跡から見つかった土器



矢頭横穴墓実測図

## MEMO

鳥根県東部家畜市場の建設に先立ち、1985年、宍道町教育委員会によって発掘調査されました。遺跡は現在残っていませんが、出土品は教育委員会に保存してあります。

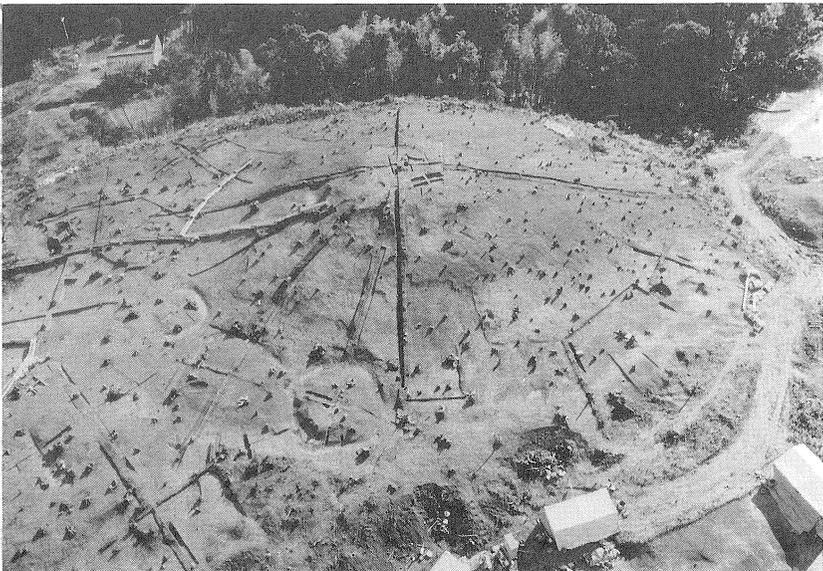
## (15) 上野 1 号墳

宍道町大字佐々布（佐々布中）

上野 1 号墳は、国道54号線を東に見下ろす、標高約70mの丘陵上に位置しています。

上野 1 号墳のある上野遺跡では、発掘調査により 8 基の古墳を検出しました。上野 1 号墳を除く他の古墳は、一辺10m前後の方墳で、円墳は見られません。これらの方墳は、古墳時代中期以降（約1500年前）に築造が開始されたものと考えられます。

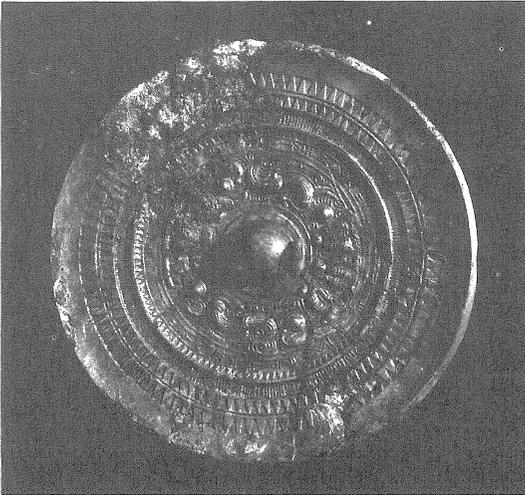
上野 1 号墳は、遺跡中央に位置する円墳で、直径が約36m、高さは約 5 mあります。葺き石や周溝のない、二段築成の大型円墳です。墳頂部には 3 基の主体部（遺体を葬った施設）が見られます。



上野遺跡全景



上野1号墳第1主体部



上野1号墳出土斜線神獣鏡

上野1号墳の中心となる墓壙には、長大な木棺を粘土で覆った粘土<sup>ねん</sup>土<sup>ど</sup>槨<sup>かく</sup>と呼ばれる施設が造られていました。木棺の長さは約7mと推定されます。棺内には<sup>ほうせいしやえんしんじゅうきょう</sup>仿製斜縁神獣鏡1面、勾玉3点、管玉40点が、棺外の粘土中には剣2本、<sup>やり</sup>槍1本が副葬されていました。また、棺に転用されていた<sup>ひれ</sup>鱗付き円筒埴輪は、大和北部型と呼ばれる埴輪で、近畿地方との交流がうかがわれるものです。

上野1号墳は、墳頂部で出土した土器や埴輪から、古墳時代前期末頃(約1600年前)に造られたものと考えられます。上野1号墳は、宍道町域に最初に造られた大型古墳であり、長大な木棺や優秀な副葬品から被葬者の力がうかがわれます。

(林 健亮)

みずたまり  
 (16) 水溜古墳群

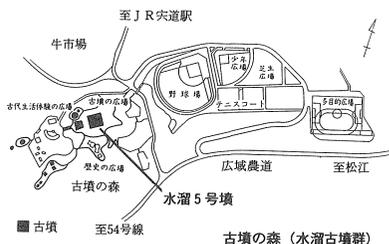
宍道町大字白石（坂口）

水溜古墳群は大小30基の古墳（前方後円墳1、円墳13、方墳16）からなる宍道町最大の古墳群です。特に、水溜5号墳は一辺25mの町内最大の方墳で、埴輪をもつ二段築成の古墳です。築かれた時期は5世紀後半と推定されます。

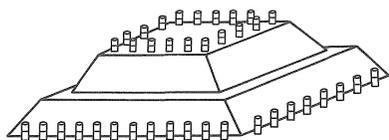
現在、水溜古墳群はその一部を取り込んで宍道総合公園・古墳の森として整備され、約4ヘクタール敷地が古代生活体験、古墳、歴史の各ゾーンに分けられています。古代生活体験の広場にはキャンプ場や高床倉庫風のキャビンがあり、古墳の広場では水溜5号墳を中心とする数基の実物の古墳が、歴史の広場では日本・島根県・宍道町の代表的な古墳が模型の形で整備されています。気軽に訪ねてみてください。



公園内に整備された水溜5号墳



古墳 至54号線 古墳の森（水溜古墳群）



水溜5号墳の墳丘推定復元図

# MEMO

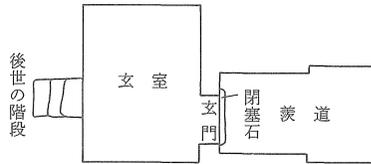
古墳の森の北隣には東部家畜市場が、さらに北に菟古館や木幡山荘があります。水溜5号墳は、1987年、宍道町教育委員会によって範囲確認調査が行われ、出土品が保管されています。

しんじ ようがいざん  
 (17) 宍道要害山古墳

宍道町大字宍道（五区）

宍道湖を望む宍道要害山の山頂にあります。中世城跡<sup>しゅかく</sup>として整備されたためでしょうか、盛土の多くを失い、全長3.8mの小さな横穴式石室が露出しています。

天井石以外は来待石の露頭をくり抜いた珍しい形の石室で、横穴墓を思わせるものです。玄室<sup>げんしつ</sup>は奥行1.3m、幅1.85mと横に長い形をしており、高さは1.35mです。

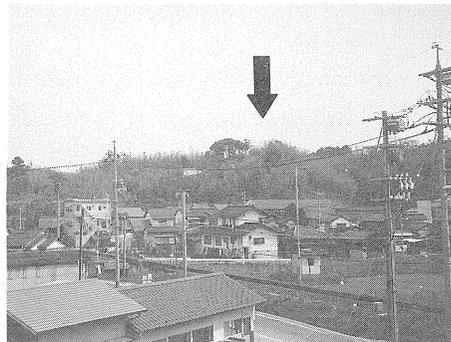


宍道要害山古墳の平面模式図

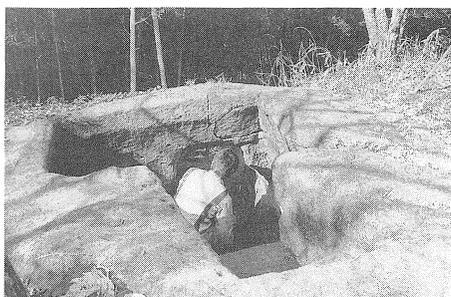
天井石はすでに失われていますが、外から見るとまるで風呂桶のようです。玄門は方形にくり抜かれていますが、閉塞石はありません。羨道<sup>せんどう</sup>は長さ1m、幅0.8mです。しかし、羨道の側壁上部には石をはめ込むために加工したと思われる跡があり、長さ2m、幅0.8mの大ききの石が乗っていたと考えられます。

なお、玄室の奥にある3段の階段は古墳に伴うものではなく、後世に加工されたものです。

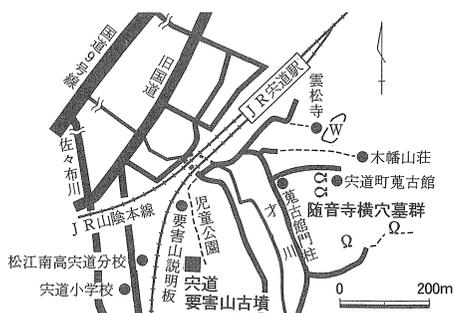
副葬品は残っていませんが、造られた時期はその形から6世紀後半と推定されます。



宍道要害山古墳遠景（54号線より）



実測中の宍道要害山古墳



## MEMO

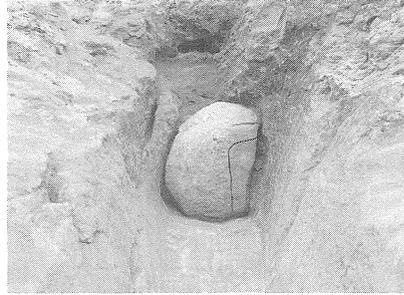
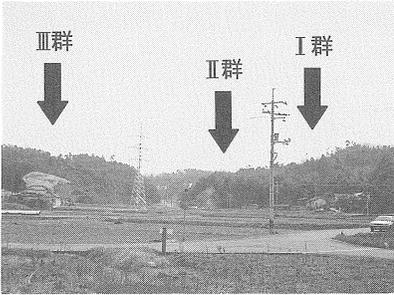
JR宍道駅の西端にある踏切を渡り、児童公園の看板の脇より登ります。古墳のある場所が宍道要害山と呼ばれる中世城跡であることから、地元ではこの古墳を「のろし台」とも伝えています。古墳を後に「のろし台」に使った可能性もありますが、真偽は不明です。また、大正時代、慰霊塔を造るときに鉄刀が発見されたとの伝えもありますが、古墳に関わるものかどうかは分かりません。

### さい (18) 才横穴墓群

宍道町大字白石（才）

才の谷の奥にある低い丘陵斜面に、Ⅰ～Ⅲ群とよぶ3つのグループからなる宍道町最大規模の横穴墓群の才横穴墓群があります。Ⅰ群は町道舟河原線の西側斜面に9穴、Ⅱ群はⅠ群の裏側斜面に2穴、Ⅲ群は町道をはさんで東側の斜面に5穴と、合計16穴の横穴墓が知られています。

ここでは代表例として、才横穴群で最も大きいⅠ群1号穴について紹介しましょう。大きさは、長さ2.4m、幅2.1m、高さ1.1mで、床

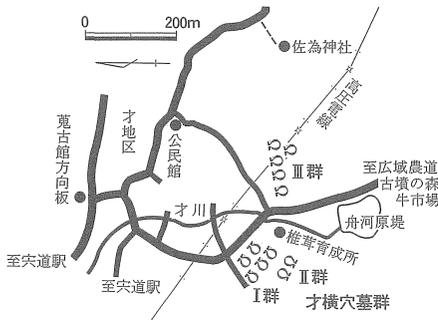


才横穴墓群 閉塞石の残っていた横穴墓（Ⅲ群4号穴）

の形は奥に向かってやや細くなっています。内部はきれいに家を形どっており、妻側に向かって長さ1.0m、幅0.7m、高さ0.9mの羨道が付いています。このように家の形をして、妻入の入口をもつ横穴墓は出雲地方西部（出雲市）を中心とする地域に多い形です。また、床には左右と奥に人を安置するためのベッド状の台が残っています。

そのほか、この横穴群にはドームのような丸い天井をもった横穴墓や、家形でも平側に入口をもつものなどがあります。

造られた時期はそれぞれの横穴墓で多少の違いはありますが、おおむね6世紀末ごろと考えられています。



## MEMO

1980年、宍道町教育委員会により実測調査が行われました。また、1991年、Ⅲ群の一部が同教育委員会によって発掘調査され出土品が保管されています。

ずいおんじ  
(19) 随音寺横穴墓群

宍道町大字宍道（四区）

宍道町<sup>しゅうこかん</sup>菟古館の敷地内にある砂岩の岩肌<sup>いんぴ</sup>に上下2穴の横穴墓が掘り込まれており、上を1号穴、下を2号穴とよんでいます。

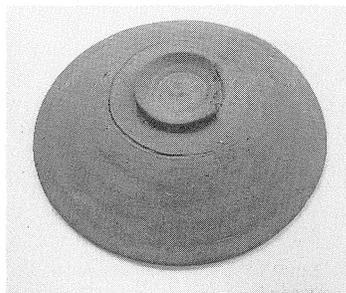
1号穴は岩肌にきれいに掘り込まれ、残り具合も良好でした。玄室は奥行1.8m、幅2m、高さ1.3mの家形に造られており、平側に羨道<sup>けんどう</sup>が付けられています。前庭部には砂岩を板状に加工した閉塞石<sup>へいそくせき</sup>も残っており、2枚の切石で入り口が閉じられていたことが分かりました。

副葬品の多くは失われていましたが、幸い前庭部に7世紀の後半に作られた須恵器の蓋が残っていたので、この横穴墓はその頃に造られたものと推定されています。

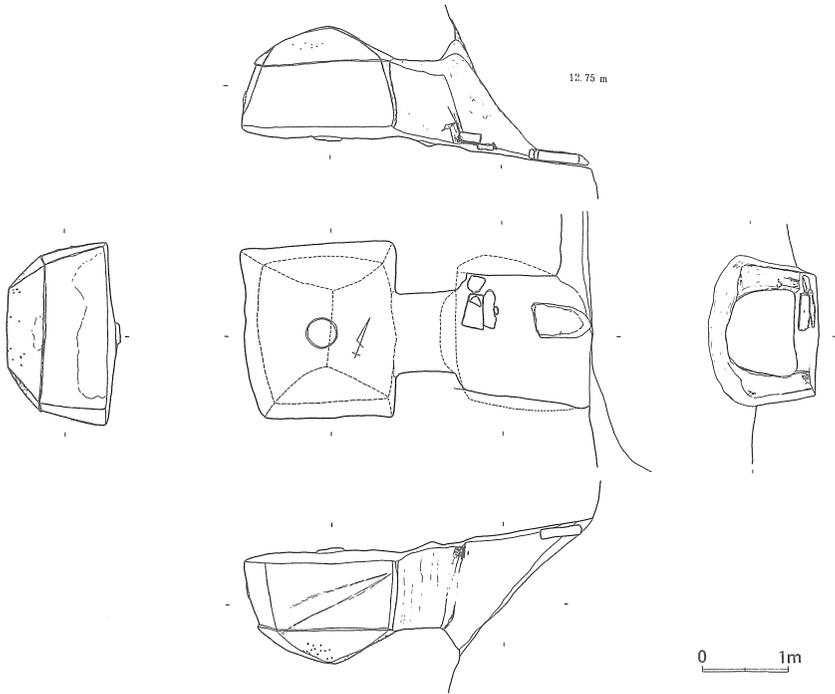
2号穴は古くから子供の遊び場や酒の製造場所になっていたらしく、壁が崩れ、かなり傷んでいました。穴の大きさは1号穴とほぼ同じですが、天井は三角形のテント形になっています。なお、副葬品は発見されていません。



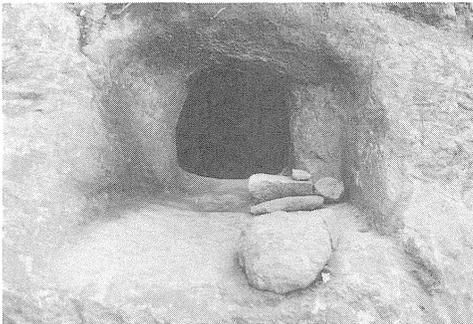
随音寺横穴墓群  
(上が1号穴、下が2号穴。現在の菟古館横)



随音寺横穴墓群1号穴から見つかった  
須恵器の蓋



随音寺1号穴実測図



随音寺1号穴の入口

**MEMO**

1985年に、実道町教育委員会により発掘調査が行われました。1号穴の副葬品は実道町菟古館で展示されています。

## えじりがわ 4. 江尻川周辺の古墳

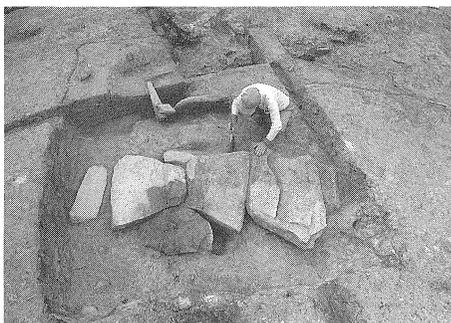
### あしがしら (20) 足頭古墳群

宍道町大字佐々布（萩田）

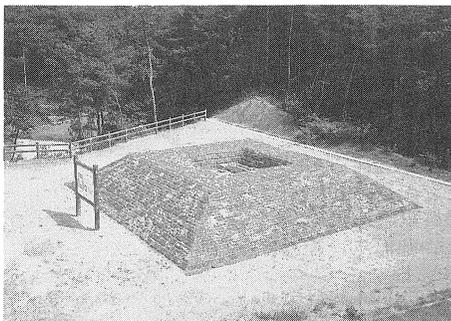
萩田団地の西隣、出雲平野を望む丘陵の上（現在の東洋ベンチャー株式会社敷地）にあり、2基の古墳からなっています。丘陵の北側を1号墳、南側を2号墳にしました。

1号墳は一辺12m×10mの方墳で、木棺に葬ったものでした。副葬品としては土器の破片が少量見つかっています。

2号墳は一辺7m×7m、高さ2mの方墳で、古墳の中心部に3m四方、深さ70cmの掘り込みをし、その真ん中に長さ180cmの石棺を置いて人を葬ったものでした。石棺の蓋石全面に赤色顔料（鉄分を酸化させ、赤色をだしたもの。ベンガラ）が塗ってあり、丁寧な埋葬をしたことがうかがえます。石棺内に副葬品はありませんでした。なお、墳丘から土師器片が一片ほど見つ



足頭2号墳から見つかった石棺



古墳の森に復元された足頭2号墳

かっています。

はっきりと古墳の造られた時期を示すものはありませんが、1号墳、2号墳とも古墳時代前半のものと考えられています。

## MEMO

1985年、宍道町教育委員会により発掘調査が行われました。古墳はなくなりましたが、古墳の森の歴史の広場には足頭2号墳が復元されています。

### こざそう (21) 小佐々布横穴墓群

宍道町大字佐々布（小佐々布）

伊志見地区との境にのびる細長い谷斜面にあります。横穴墓は来待石の岩盤に掘り込まれており、現在5穴ほど見つかっています。いずれも保存がよく、横穴墓を造るときにできたつるはし状のみ痕が残っているものもありました。区別をするために1号～5号穴の呼び名をつけることにしています。

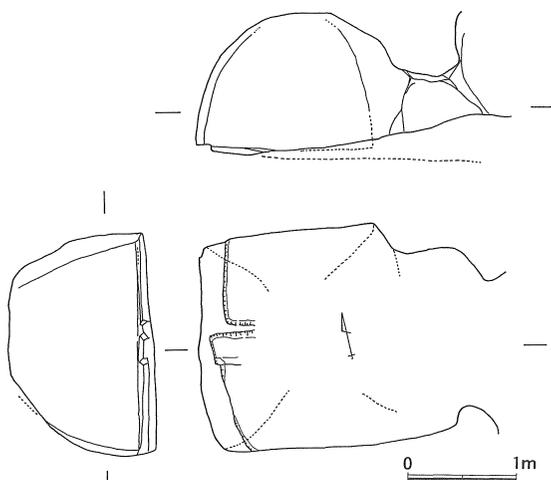
1号穴の玄室は、長さ約1.6m、幅約1.9m、高さ1.35mで、やや横長な長方形になっており、長辺のほぼ真ん中に羨道が付いています。天井はドーム状に丸く、床の両側には屍床を置いたベッド状の区



小佐々布横穴墓群 3号穴

画が造られていました。

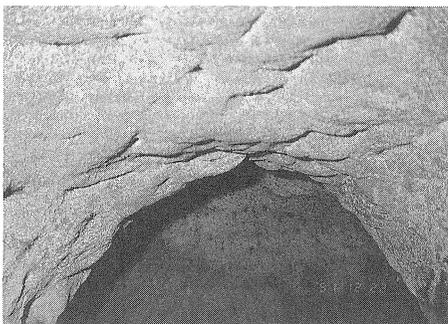
5号穴の玄室は、長さ2.0m、幅2.6m、高さ1.6mで、横穴墓としては大きなつくりです。1号穴と同様、長辺のほぼ真ん中に羨道が付いており、天井はドーム状になっていますが、1号穴に比べる



小佐々布横穴墓群3号穴実測図

と家の内部を形どろうという意識がみうけられます。なお、副葬品は見つかりませんでした。

ちなみに、小佐々布横穴墓群は奈良時代に意字郡<sup>おう</sup>として行政区画される地域のうち、最西端にある横穴墓群です。



小佐々布1号穴の入口に残るノミの痕

## MEMO

江尻川周辺では唯一の横穴墓です。近年確認されたもので、今後付近でも発見されるかもしれません。

## Ⅳ 宍道町の古墳時代

〔古墳時代前期〕 宍道町で最も古い古墳は佐々布下<sup>さそうしも</sup>にある佐々布下1号墳です。墳丘から見つかった土器から古墳時代前期の早い時期につくられたことが分りました。古墳のある小高い丘陵下は現在出雲平野の一部になっていますが、古墳時代には眼下に宍道湖を望む場所でした。（古墳時代には宍道湖の湖岸線が麓まで迫っていたと考えられます。）

〔古墳時代中期〕 古墳時代中期に造られた古墳としては松石古墳群<sup>まついし</sup>（東来待<sup>よこた</sup>）、横田古墳（西来待<sup>みづたまり</sup>）、水溜5号墳（白石、古墳の森内）、上野1号墳、足頭2号墳（佐々布）などが知られています。このうち、横田古墳は墳丘や副葬品については分かっていませんが、埋葬施設として舟形石棺<sup>ふながたせっかん</sup>をもつ古墳です。この舟形石棺は宍道町から玉湯町にかけて産出される「白粉石<sup>しろこいし</sup>」と呼ばれる柔らかい石でできており、同様の石棺は隣の玉湯町でも数例あります。舟形石棺は出雲地方に13例ほど知られ、中には巨大な墳丘を伴うものもあります。そのうちの6例が宍道町と玉湯町に集まっており、この地域の特徴となっています。

〔古墳時代後期〕 古墳時代後期になるとそれ以前に比べ極端に古墳の数が増えており、中小河川によってできた谷平野には横穴式石室<sup>よこあなしきせきしつ</sup>をもつ古墳や横穴墓が造られていきます。

横穴式石室をもつ古墳としては西来待の知原2号墳<sup>ちばら</sup>、知原4号墳、

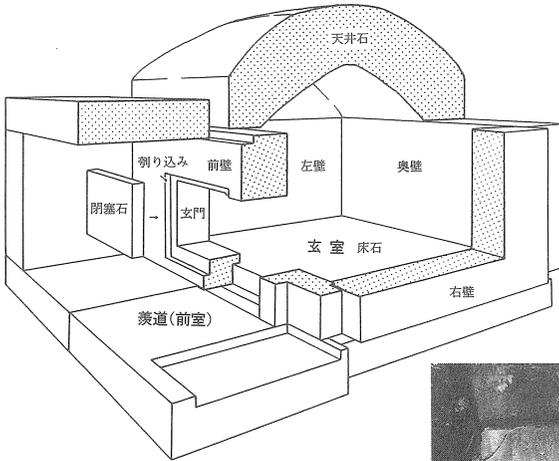
白石の<sup>しいやま</sup>椎山1号墳、伊<sup>い</sup>賀<sup>が</sup>見<sup>み</sup>1号墳、下<sup>しも</sup>の<sup>そら</sup>空古墳、東<sup>か</sup>来<sup>か</sup>待<sup>み</sup>の<sup>たご</sup>鏡北廻古墳が知られていますが、その数はあまり多くはありません。これらは地域の首長の墓と考えられており、一般的には同地域にある<sup>よこあなほ</sup>横穴墓より身分の高い人の墓といわれています。したがって、横穴式石室をもつ古墳と横穴墓の広がり調べることによって当時の政治的な勢力図が分かるのです。

### 〔古墳からわかる当時の政治勢力〕

まず、旧<sup>い</sup>宍<sup>し</sup>道<sup>ま</sup>町<sup>ち</sup>域（今の大字白石、宍道、佐々布）をみていきましょう。同<sup>どう</sup>道<sup>どう</sup>川<sup>が</sup>流<sup>り</sup>域<sup>えき</sup>には6世紀の中頃に椎山1号墳、続いて伊賀見1号墳が、さらに7世紀になると下の空古墳が造られています。旧宍道町域では他に横穴式石室をもつ古墳はありませんので、この地域を支配した首長は常にこの同道川流域を根拠地としていたことが分ります。奈良時代になるとこの旧宍道町域は宍道郷として一つの行政単位になりますので、宍道郷の成立には古墳時代後期の古墳の分布にみられるように同道川流域の豪族の勢力範囲が色濃く反映していたと考えられます。

ちなみに、伊賀見1号墳の石室は横穴式石室の中でも「<sup>せつかんしきせきしつ</sup>石棺式石室」と呼ばれるもので、現在の松<sup>おお</sup>江<sup>は</sup>市<sup>し</sup>大<sup>だ</sup>庭<sup>てい</sup>町<sup>ち</sup>、山<sup>やま</sup>代<sup>しろ</sup>町<sup>ち</sup>を本<sup>ほん</sup>拠<sup>きょ</sup>地<sup>ち</sup>とする豪族と密接なつながりをもつ地域首長のみが許された、きわめて政治的な意味をもつ石室です。

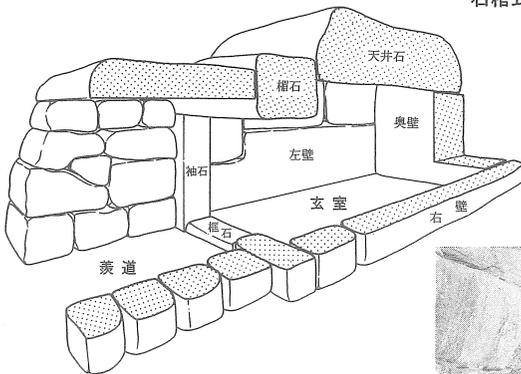
もっとも、政治的な力関係から横穴式石室の古墳を築けなかった人たちも自分たちのお墓を造るにあたっては、なるべく横穴式石室に似たものを造るようになっていきました。たとえば<sup>しんじょうがいさん</sup>宍道要害山上にある



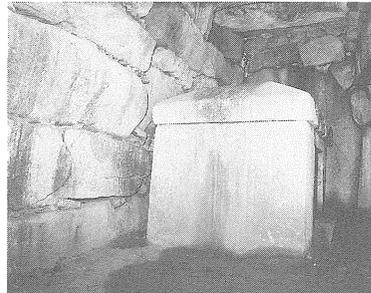
石棺式石室各部の名称  
(『石棺式石室の研究』より)



石棺式石室（永久宅後古墳）の正面



横穴式石室各部の名称  
(『石棺式石室の研究』より)

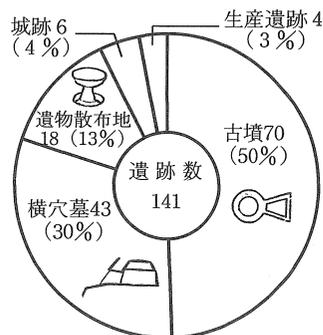


横穴式石室（大念寺古墳）の内部

要害山古墳は厳密には横穴式石室をもつとはいえませんが、その造り方は「石棺式石室」をモデルとしています。また、小佐々布横穴墓群（佐々布）、岩穴<sup>いわあなぐち</sup>口古墳（宍道）なども「石棺式石室」の影響を受けています。

次に、旧来待村域（大字東来待、西来待、上来待）をみていきましょう。小規模な横穴式石室をもつ古墳としては来待川の中流にある知原2号墳、知原4号墳の2つが知られています。この地域は、奈良時代の行政区分では現在の玉湯町林地区と合わさって<sup>はやしのさと</sup>拜志郷となっています。林地区の林本郷には前方後円墳4基を含む約50基からなる林古墳群があり、その中からは大形の「石棺式石室」（林8号墳）も見つかっています。

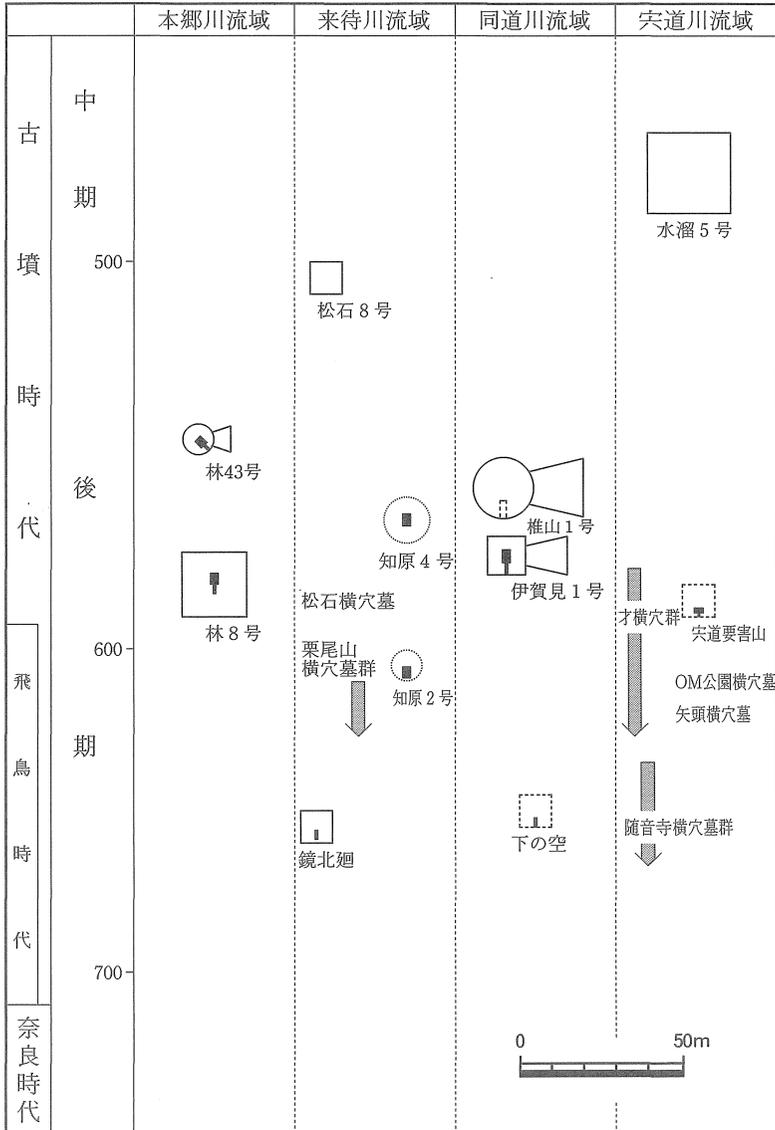
現在のところ、来待地区からはこの林古墳群、同道川流域の首長墓に匹敵するだけの古墳は見つかっていませんので、後に拜志郷になっていく地域が地方豪族の勢力範囲とすれば、来待地区は林古墳群を造った勢力の下か、同道川流域の首長の勢力下のいずれかに組み込まれていたことが考えられます。



宍道町の遺跡グラフ

(『島根県遺跡地図』I 1987年を参照)

宍道町および周辺部の古墳の変遷  
(古墳時代後期を中心とする)

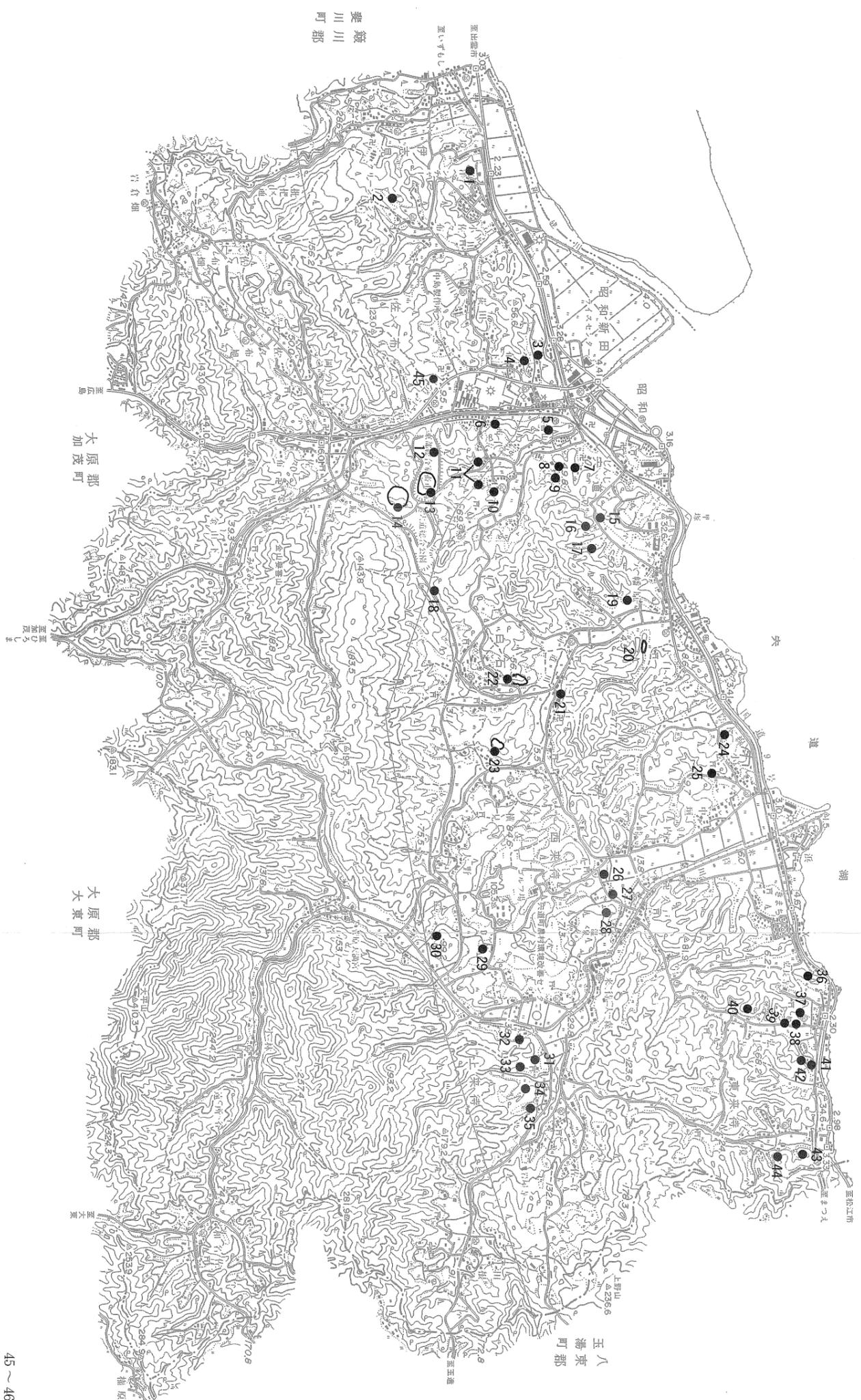


## 宍道町の古墳

(『島根県遺跡地図』I 1987年に一部追加)

番 号	名 称	番 号	名 称
1	足頭古墳群	24	尻ハミ古墳
2	小佐々布横穴墓群	25	宇由比神社古墳
3	佐々布下古墳群	26	横田古墳
4	観音寺横穴墓	27	知原古墳群
5	宍道要害山古墳	28	高松古墳群
6	OM公園横穴墓	29	大野原古墳
7	随音寺横穴墓群	30	菅原横穴群
8	横町横穴墓	31	栗尾山横穴群
9	西代横穴墓	32	角田横穴墓群
10	才古墳	33	佐久多神社裏古墳
11	才横穴墓群	34	佐倉末の廻横穴墓群
12	矢頭横穴墓	35	佐倉横穴墓群
13	清水谷遺跡	36	三成古墳群
14	水溜古墳群	37	弘長寺古墳
15	岩穴口古墳	38	明寿廻古墳群
16	割岩横穴墓	39	弘長寺横穴墓群
17	後谷横穴墓	40	多井古墳群
18	女ヶ峠横穴墓	41	松石横穴墓
19	荻古墳	42	松石古墳群
20	伊賀見古墳群	43	大紋古墳
21	下の空古墳	44	鏡北廻古墳
22	椎山古墳群	45	上野1号墳
23	横見古墳群		

央道町の古墳分布



# V 古墳時代前後の宍道町

## 1. 古墳時代より前の宍道町

### (1) 縄文時代<sup>じょうもんじだい</sup>

今から約一万年前から弥生時代の始まる約2,300年前までの間を縄文時代といいます。この時代、人々は初めて土器を作り、その表面に縄目などの模様を施して利用しました。これを縄文土器<sup>じょうもんどき</sup>と呼んでいます。この時には、まだ稲作などは始まっておらず、石器、骨角器<sup>こつかくき</sup>などを使って狩りや漁を中心とする生活でした。

弘長寺地区の弘長寺遺跡<sup>こうちょうじ</sup>からは石で作った斧が、同じく弘長寺地区の三成遺跡や下白石の伊野谷遺跡<sup>いのだに</sup>からは縄文土器が見つかっています。

### (2) 弥生時代<sup>やよい じだい</sup>

紀元前2、3世紀になると人々は大陸から伝わってきた米作りを始めるようになりました。宍道町からはこの頃の遺跡や遺物は見つかりませんが、米作りの技術が日本に伝わるとまたたく間に全国に広がったことから、この地方でも時をほぼ同じくして始まったとみてまちがいないでしょう。

水田を耕し米を作るようになると、治水工事を行ったり、水や収穫物を管理したり、豊作を祈るお祭りを司るために一部の有力者が出現

し、身分の上下関係が生まれました。

また、安来市、松江市、出雲市などで見つかっている「四隅<sup>よすみ</sup>突出形墳丘墓<sup>としゅつがたふんきゅうぼ</sup>」と呼ばれるお墓は地域の有力者のための特別なお墓が造られたことから、弥生時代になるとかなりはっきりした階級差が生まれたことが分かります。宍道町では才地区で見つかった清水谷<sup>しみずだに</sup>2号墓（現 中央家畜市場内）が町内で知られている唯一の弥生時代のお墓です。

宍道町内では清水谷2号墓のほか、弘長寺地区の三成遺跡や岡の目地区の平田遺跡からは弥生土器が、才地区の矢頭遺跡からは弥生時代の建物跡が見つかっています。今後の発掘調査などによって、もっと多くの遺跡、遺物が発見されてくることでしょう。

ところで、現在宍道町<sup>しゅうこかん</sup>菟古館で展示されている「邪視文銅鐸<sup>じゃしもんどうたく</sup>」と呼ばれる銅鐸をご覧になったことがありますか。全国的にも有名なこの銅鐸は正面に悪霊を追い払うための邪視文と呼ばれる目の形をした模様が描かれていたことからこの呼び名がついています。

銅鐸は豊饒を祈るお祭りに使われた祭器といわれています。もともと音を鳴らす青銅<sup>せいどう</sup>の道具であったものが、日本に伝わるとその神秘性から祭器として利用されていったと考えられています。古い形の銅鐸は高さ20～30cmで、内部に吊して音を出す棒状のものをもっていました。徐々に大型化し、高さ1mにおよぶものも出現しました。

## 2. 古墳時代より後の宍道町

な ら じ だ い い ず も の く に ふ ど き  
奈良時代（『出雲国風土記』にみる宍道）

古墳が造られなくなってから50年近くが過ぎた8世紀初め、都は奈良の平城京へ遷され、奈良時代（710年～794年）が始まりました。そのころの宍道町はどのようなようすだったのでしょうか。出雲国には幸い733年（天平5）に書かれた『出雲国風土記』が伝わっており、当時のようすが具体的に描かれています。『出雲国風土記』によって今から約1,260年前の宍道町をみてみましょう。

風土記によると、現在の宍道町は意宇郡の宍道郷、宍道駅、拝志郷の一部、出雲郡の建部郷の一部から形作られていることが分かります。当時の戸数は約100戸、人口は約2,500人程度と推定されています。

宍道駅には公用の使者の駅馬と宿泊施設をもつ駅家が設けられ、駅長1名、駅子、伝子が置かれるとともに、駅田2町、駅馬5匹が配備されていました。この駅家のあった所は、現在の佐々布下あたりと考えられています。

宍道の地名由来も『風土記』に次のように記してあります。「出雲の国を治めていた大穴持命（大国主命）が狩りをされたところ、追っていた犬一匹と追われていた猪二匹とが石となりました。それらは今も南の山に残っています。この古事より（猪の通った道という意味から）この地域を猪の道＝宍道と呼ぶようになりました。」

宍道地域には寺院があったという記述はありませんが、いくつかの



## VI おわりに

以上紹介しましたように、宍道町には多くの古墳が知られています。これらは千数百年の風雪に耐えて今日に残っていますが、中には発掘が行われ、埋葬施設や副葬品などが具体的に分かったものも少なからずあります。その一方、昨今の地域開発により調査後消滅したものも存在します。

この小冊子により読者の方々にそれらの記録が伝わり、併せて、各地区の古墳の在り方などを理解頂き、埋蔵文化財の保護に多少なりとも役立てばと思い執筆しました。また、私たちの身近にある古墳を見学する際の手頃なガイドブックとなれば幸いです。

なお、紙面の都合で町内総ての古墳を記述することはできませんでした。一覧表と位置図を載せましたので、ご利用ください。

### 付 記

発掘や分布調査で、宍道町の遺跡に20年近くかかわった関係により、『宍道町ふるさと文庫』に町内の古墳をまとめてほしいとの依頼を受けました。しかし、遅々として進まない作業が多く、担当者であり、共同作業者である稲田 信氏には大変ご迷惑をかけました。

また、次のみなさんには刊行に当たりご教示、ご協力を賜りました。  
飯国芳明、石原 順、磯村賢治、大国晴雄、勝瀬利栄、近重克幸、  
水口晶郎、原田敏照、守岡正司、山本 清 (敬称略)

## 宍道町歴史年表

西 暦	時 代	島根県（宍道町）のできごと	全国のできごと
10,000	旧石器		各種の旧石器が作られる 土器作りが始まる
	縄	宍道湖湾の出現	縄文海進
1,000	文	弘長寺遺跡、三成遺跡等の形成 (晩期)	
200		日本海沿いに弥生文化が伝播する	水稲耕作が始まり、弥生文化が広まる
BC 100			
AD 100	弥	銅鐸、銅剣祭祀が行なわれる (邪視文銅鐸)	
	生	四隅突出墳丘墓が造られ始める 清水谷2号墓が築かれる	倭国大乱 耶馬台国の卑弥呼が中国の魏王朝に 朝貢する
200			
300		竪穴式石室をもつ古墳が出現する	畿内を中心に統一勢力の形成 前方後円墳の出現
400	古		
	墳	横田古墳 横穴式石室の導入 (椎山1号墳→伊賀見1号墳)	須恵器の生産が始まる 筑紫国造磐井の乱 (527) 聖徳太子、摂政となる (593)
500			
600	飛	横穴墓の導入 (随音寺横穴墓群) 鏡北廻古墳が築かれる	
	鳥		
700			平城京に都を置く (710)
	奈	出雲国風土記ができる (733)、宍道 郷・宍道駅の記述 出雲国分寺、尼寺が建立される	古事記、日本書紀が成る 平安京に遷都 (794)
800			
	平	小松(西來待)で須恵器が生産される	天台宗、真言宗が開かれる 菅原道真、大宰府へ左遷
900	安		

## 用語解説

[<sup>えんぶん</sup>円墳] 平面形が丸く、マンジュウ形に盛り土された古墳。一般的な形態。(例) 知原4号墳

[<sup>ほうぶん</sup>方墳] 平面形が四角く、四角台に盛り土された古墳。出雲地方には多い。(例) 大野原古墳、水溜5号墳

[<sup>ぜんぽうこうえんぶん</sup>前方後円墳] 円墳と方墳がくっついた墳形で、古墳の中でも代表的な形である。首長墓としてよく採用される墳形で、一般的にはは後円部に埋葬施設がある。(例) 椎山1号墳

[<sup>ぜんぽうこうほうぶん</sup>前方後方墳] 大小2つの方墳がくっついた形の古墳。首長墓としてよく採用される墳形で、出雲地方ではわりと多く知られている。一般的には後方に埋葬施設がある。(例) 横見1号墳

[<sup>もっかん</sup>木棺] 墳墓の一般的な埋葬施設で、大きな木材を筒状にくり抜いたり(割竹形木棺)、板を箱形に組み合わせたもの(箱式木棺)が知られる。

[<sup>はこしきせっかん</sup>箱式石棺] 墳墓の一般的な埋葬施設で、石を組み合わせて箱形に作った棺。(例) 松石1・8号墳

[<sup>ふながたせっかん</sup>舟形石棺] 舟の形に石をくり抜いて蓋と身を作り、組み合わせた埋葬施設。古墳時代中期に流行する。(例) 横田古墳

[<sup>ながもちがたせっかん</sup>長持形石棺] 板石を長持の形に組み合わせた埋葬施設。古墳時代中期に流行し、首長墓に多く採用される。

<sup>いえがたせっかん</sup>  
[家形石棺] 天井の石が家形をしている。石をくり抜くものと、組み合わせるものがあり、古墳時代後期に流行する。横穴式石室、横穴墓などに埋納したりする。(例) 栗尾山横穴墓

<sup>よこあなしきせきしつ</sup>  
[横穴式石室] 石を組み合わせた石室の埋葬施設で、閉塞石の開け閉めで追葬することができる。死者を安置する玄室と、玄室への道の羨道からなっている。古墳時代の後期に一般化された。(例) 知原2・4号墳

<sup>せっかんしきせきしつ</sup>  
[石棺式石室] 横穴式石室の中の一形態で、各壁一枚石を原則に石室を造っており、全体の形は家形石棺を大きくしたもの。九州に起源をもち、古墳時代後期には出雲地方の首長墓の埋葬施設として流行した。(例) 伊賀見1号墳、下の空古墳

<sup>みみわ</sup>  
[耳輪] 今のイヤリング。銅の輪に金、銀をメッキしたもので、古墳時代後期の古墳や横穴墓からよく発見される。

<sup>すえき</sup>  
[須恵器] 登り窯で焼かれた灰色をした硬い焼きの土器。朝鮮半島からの技術の影響を受けて作られたもの。古墳時代後期以降、普及する。器種も多く、<sup>ふたつき</sup>蓋坏、<sup>はそう</sup>高坏、<sup>ていべい</sup>甗、<sup>かめ</sup>提瓶、壺、甕などがある。

<sup>はじき</sup>  
[土師器] 縄文土器、弥生土器の系譜をひく、肌色をした素焼きの土器。器種は壺、甕、高坏、皿、鉢、<sup>こしき</sup>甑などがある。須恵器の出現以降は煮炊き用具（甕、カマド）が主になってくる。

<sup>はにわ</sup>  
[埴輪] 墳丘上やその裾に立て廻らされた土管状の円筒形態の円筒埴輪と、人物や動物などを形どった形象埴輪とがある。

宍道町内の古墳をもっと詳しく知るために

## 主な文献一覧

「松石古墳群」『宍道町埋蔵文化財調査報告』 宍道町教育委員会

1978年

「地域と古墳と磨崖仏」『宍道町埋蔵文化財調査報告』 2

宍道町教育委員会 1980年

「清水谷・矢頭遺跡発掘調査報告書」『宍道町埋蔵文化財調査報告』

4 宍道町教育委員会 1985年

「随音寺横穴群発掘調査報告書」『宍道町埋蔵文化財調査報告』 5

宍道町教育委員会 1986年

「水溜古墳群」『宍道町埋蔵文化財調査報告』 6 宍道町教育委員会

1988年

「椎山古墳群調査報告書」『宍道町埋蔵文化財調査報告』 7

宍道町教育委員会 1989年

「宍道町の文化財めぐり」『宍道町ふるさと文庫』 2

宍道町教育委員会 1990年

山本 清「宍道町の古墳及び出土品」『宍道町誌』 宍道町 1963年

「石棺式石室の研究」『古代の出雲を考える』 6 出雲考古学研究会

1987年

## 著者紹介

西尾克己(にしお かつみ)

1952年 出雲市稗原町生まれ

島根大学(教育専攻科)卒

現在 島根県教育委員会勤務

宍道町史編纂委員

### 主な著書

「松石古墳群」『宍道町埋蔵文化財調査報告』 1978年(編著)

「地域と古墳と磨崖仏」『宍道町埋蔵文化財調査報告』2 1980年(〃)

「出雲平野の古墳」『出雲市民文庫』9 1991年(共著)

宍道町ふるさと文庫6

### 宍道町の古墳時代

1992年3月31日初版発行

1998年3月31日第2版発行

著者 西尾克己

発行 宍道町教育委員会  
八束郡宍道町大字昭和1番地

印刷 株式会社 谷口印刷  
松江市東長江町902-59

穴道町教育委員会

